

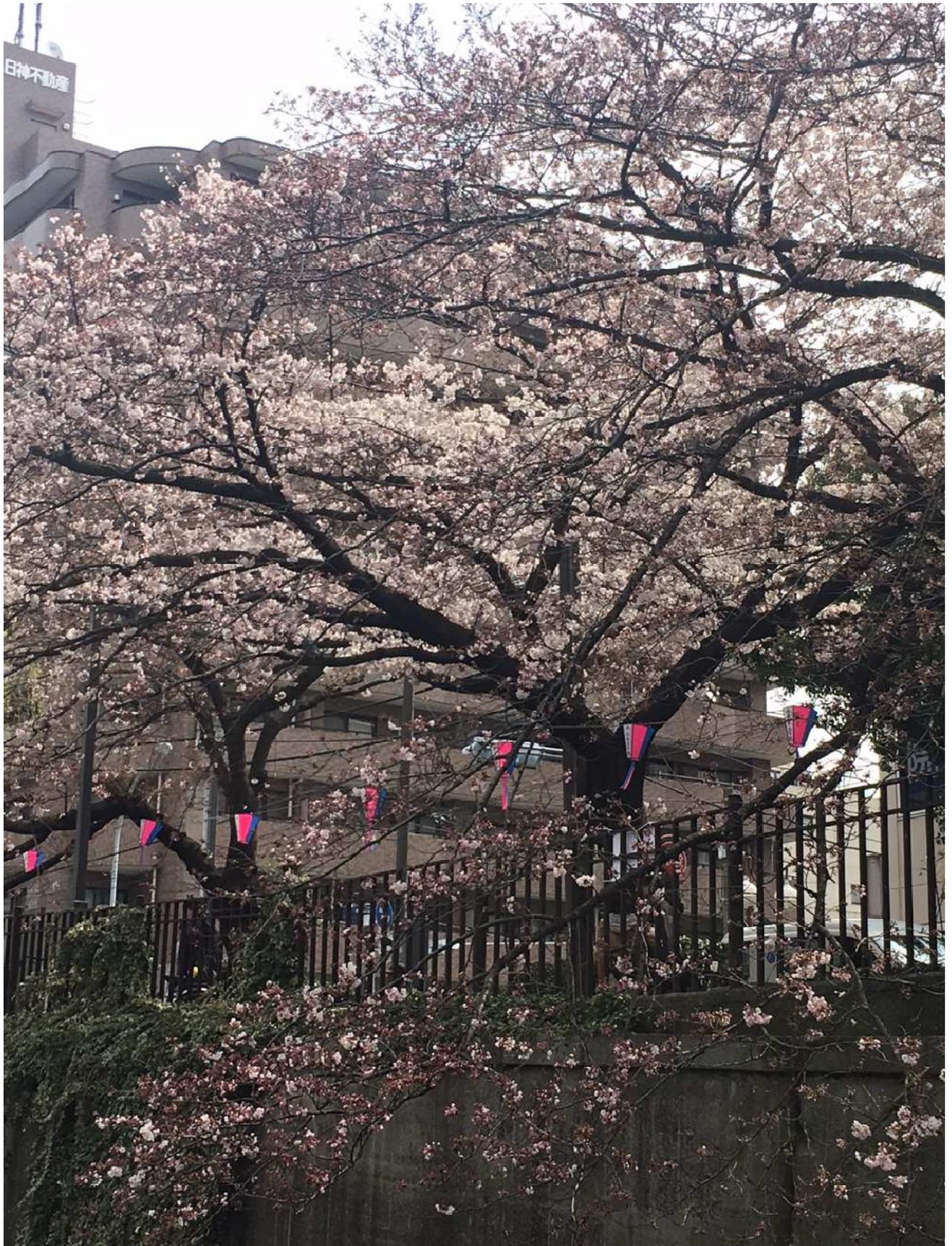
大岡川の桜 於:横浜



















イタリアンバイキング 於: インターコンチネンタルホテル

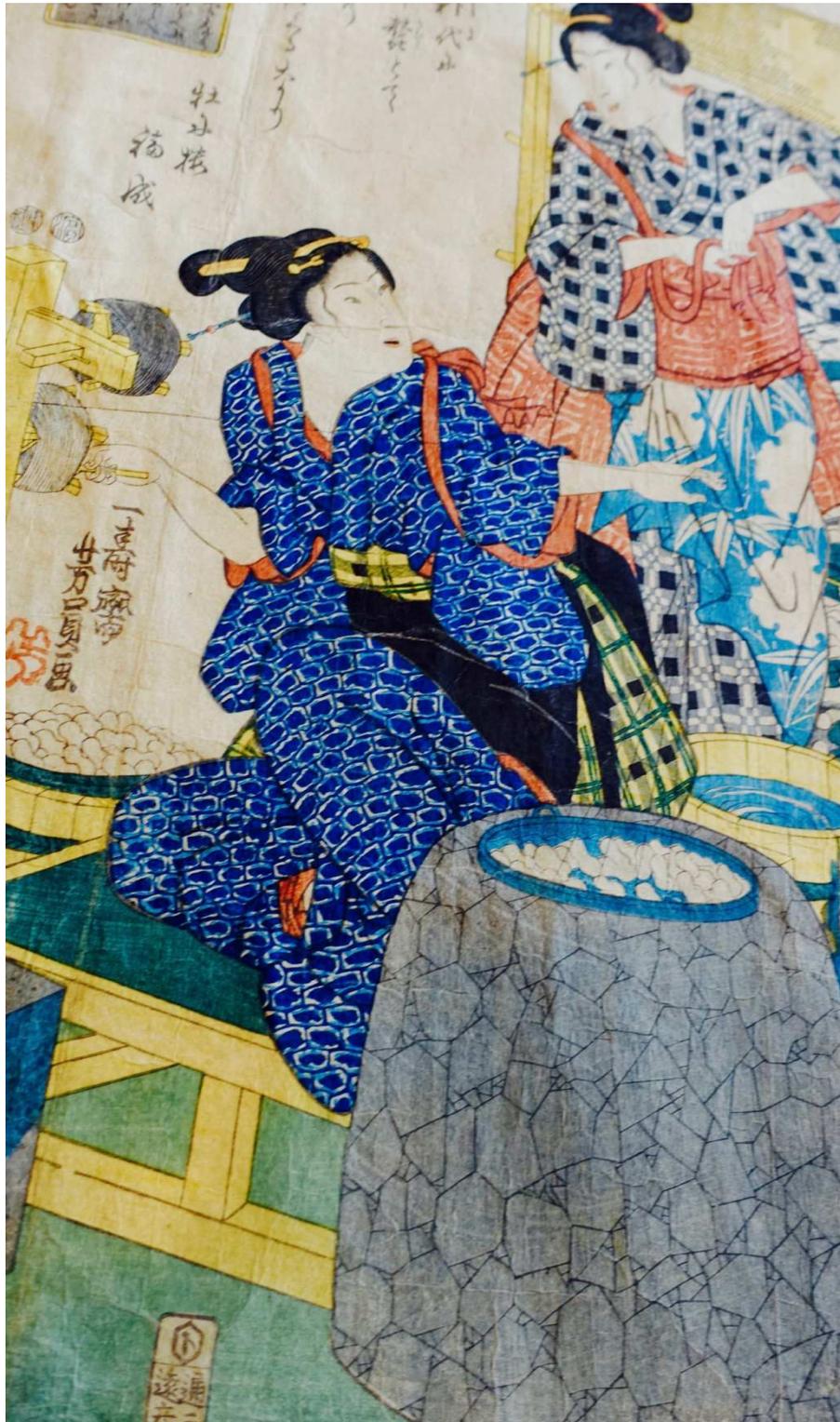


高見澤講師によるシルクの解説 於: シルク博物館





横浜港の見える展望カフェにて懇親&浮世絵勉強会



シルクに関する浮世絵(高見澤氏所有)

絹

絹は、蚕の繭からとった動物繊維である。蚕が作り出すタンパク質の「フィブロイン（繊維素）」を主成分とし、その周りを「セリシン」という硬タンパク質に覆われている。

絹の発祥は紀元前 2460 年ごろ中国の黄帝（BC. 2510～BC. 2448 年、神話伝説上では三皇の治世を継ぎ中国を統治した五帝の最初の帝であるとされる。また、三皇のうちに数えられることもある）の王妃・西陵（黄帝の正妃、西陵氏の娘、玄囂・昌意のふたりの男子を産んだ）がお湯の中に繭（まゆ）を落としてしまい、それを箸で拾い上げようとしたときに箸に巻きついてきたのが絹糸の発見したといわれている。

これらを織物にして西方諸国に輸出するため、西安（長安）とトルコのアンタキアを結ぶ 7000 キロの道がつながった。これが「シルクロード」である。前漢の時代には、蚕室の温育法や蚕卵の保管方法が確立していた。四川省では「蜀錦」の生産が始められた。当時、カイコから糸を製法する技術は中国国内で門外不出とされており、他の地域では絹の製法が分からず、中国から陸路・海路でインドやペルシア方面に輸出されていた。紀元前 1000 年頃の古代エジプトの遺跡から中国絹の断片が発見されている。絹織物は同じ重さの金と交換されていた。

中国以外で養蚕が始まったのは 6 世紀ごろといわれており（東ローマ帝国）、欧州にも養蚕技術が広まった。英国では絹の国産化がうまくいかず、他の欧州諸国よりも中国産の良質な生糸を求める意欲が強く、英清間の貿易不均衡を生み、アヘン戦争の遠因になったとする説もある。

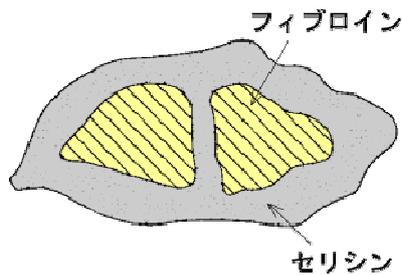
日本には弥生時代に朝鮮半島から伝わり、律令制の下では納税のための絹織物の生産が盛んになっていたが、品質は中国絹に遠く及ばなかった。このため、西陣や博多などの主要絹織物産地では中国絹が原材料として用いられていた。江戸時代に入り、寛永年間（1624～1645 年）から品質改良が進められ、江戸幕府は蚕種を確保するなど独占販売を試みたが、各地で養蚕や絹織物産業が勃興し、生糸や絹織物の産地が形成された。江戸時代中期には、日本絹は中国絹に劣らない品質を生むようになっていた。

明治時代には著しい発展を遂げ、1909 年に日本は清を上回る世界最大の絹の生産国となった。生糸生産は、群馬県富岡市の旧官営富岡製糸場（片倉工業㈱富岡工場）が近代国家に先駆けて明治 5 年（1872 年）10 月に大々的に開業した。現在でも群馬県は、国内繭生産の 40%、生糸生産の 25%を占める日本一の蚕糸県となっている。

現在、生糸になる繭の生産量は、世界中で約 50 万トン、そのうち中国が半数を占めている。

絹の構造			
原産地	中国	インド	日本 (群馬県、福井県、長野県)
長さ	1200～1500 メートル		
太さ	2.8 デニール		
断面形状	半楕円形又は三角形		
構成	表面:「セリシン」という硬たんぱく質 内面:「フィブリン」という繊維素		
特徴	一般的に使用されている 光沢感がある やわらかさが非常に良い。	多少の黄ばみがある 光沢感がある やや硬いものも多い	一般的に使用されている。 表面の光沢感がある やわらかさが非常に良い。 地方により透き通るような緑色のものがある。
蚕・繭玉			
	蚕(かいこ)		繭玉(まゆだま)

絹糸断面



- ◆ 絹繊維（繭糸・まゆいと）の断面は、半楕円形、または三角形をしており、これが乱反射して優美な光沢を放つ。その側面を見ると、ところどころに節があり、化学繊維のように均一な性状ではない。
- ◆ 繭（まゆ）は網目状になっており、その交差しているところは「セリシン」という硬タンパク質によって固着している。セリシンをとり除くと、フィブロイン（繊維素）があらわれ、比較的なめらかになる。このフィブロインによって、絹織物独特のしなやかさやドレープ性、光沢などを生み出している。

【絹の特性】

- ◆ 美しい光沢：シルクの繊維断面は三角形のため光を反射するとプリズムのように光を反射する。
- ◆ しなやかでドレープ性が高い：繊維が細いため、肌触りがとても良い。
- ◆ 夏涼しくて、冬暖かい：繊維と繊維の間に空気を蓄えているので、熱伝導率が低い。
- ◆ 素肌にやさしい：18種類のアミノ酸たんぱく質で出来ており、人間の皮膚の成分と似ている。
- ◆ 静電気が起こりにくい：保湿性が高いため、水分により静電作用が起こりにくい。
- ◆ 太陽光に弱い：たんぱく質繊維のため、紫外線により表面劣化が起こり、黄ばみがでる。
- ◆ シミが出来やすい：水や汗などの水分に弱く、色物などは色落ちしてしまう。
- ◆ 摩擦に弱い：繊維が細いため、摩擦などで切れてしまう。
- ◆ 比重は“1.30～1.37”：セリシンを除いた綿糸は、1.25くらいで水より少し重い繊維ある。

【利用用途】

- ◆ シルクは、風合いや保温性、通気性、光沢性など様々な利点があり、ブラウスやシャツ、セーター、着物など高級衣料品に使用されている。

- ◆ 寝具など人の肌に触れる製品にも高級素材として利用されている。
- ◆ 保湿性をもつアミノ酸の効果を利用して、化粧品ではプロテイン配合シャンプーやシルクパウダーなどが作られている。
- ◆ 食品でも、クッキー、パン、うどんなどに使われている。

【呼び方（デニール）】

- ◆ 生糸・絹糸（フィラメント糸）は0.05gで長さが450メートルあるものを1デニールとする。
- ◆ 生糸は、数個の繭から糸を取り出し、束ねて糸にするため、生糸の太さにはむらがあり、ぴったりの太さにはなっていない。そこで、生糸を取り引きする際は、例えば、14デニールを中心として若干太さむらのある糸を14中と呼ぶ習慣になっている。
- ◆ デニールは、絹糸のほか、化合繊フィラメント（合成繊維全般）で使用されている。
- ◆ フィラメント糸の定義として、連続した長い繊維（フィラメント）からなる糸で、太さが均一、毛羽立ちが少なく、平滑で光沢があり、ふくらみが少なく、冷たい感触となっている。
- ◆

【製造方法】

- ◆ 一匹の蚕（カイコ）は、一生の間に、約20グラムの桑の葉を食べ、体積で75倍、体重で約1万倍にまで成長する。全身が黄金色に透きとおった熟蚕（じゅくさん）になると、1分間に60回くらい頭を振り、S字を描きながら繭をつくり始めます。この動きは「シルク・ウエーブ」と呼ばれている。
- ◆ 繭の重さは約2グラム。そのうち80パーセントがさなぎで、残り20パーセントが繭（まゆ）の層（糸になる部分）である。この繭の層のほぼ85パーセントが生糸になり、残りの15パーセントは絹紡糸の原料になる。
- ◆ 蚕からはき出される糸（絹繊維2本含有）は0.5グラム。糸の長さは1,200～1,500メートルで、太さは2.8デニール。
- ◆ 繭を収穫し80℃くらいの乾熱にさらして殺蛹（さつよう）し、製糸工程に移され生糸が作られる。
- ◆ 最終的に絹糸の太さは、約1デニール（1グラムで9,000メートル分の長さ）がある。

【染色】

- ◆ 生糸を精練（生糸のセリシンを溶解除去）後、水で膨潤させた糸を 40～50℃ 程度の染浴に浸漬させてから加熱する。
- ◆ よくかきまぜながら温度を上げていくが、生糸は 85℃ 以上の温度にすると、絹繊維の光沢が損なわれてしまう。
- ◆ 20～30 分かきまぜながら染まり具合を確かめ、最後に水で残った染料を洗い流す。



2017年4月2日

東藝術倶楽部勉強会・横浜編資料

横浜の歴史

【現代の横浜】

総人口：3,728,021人（平成29年3月1日現在）

〔現在の総人口は日本の市町村では最も多く、人口集中地区人口も東京23区（東京特別区）に次ぐ。〕

総面積：435.29 km²

〔神奈川県内の市町村では面積が最も広い。〕

行政区：18区（鶴見区、神奈川区、西区、中区、南区、港南区、保土ヶ谷区、旭区、磯子区、金沢区、港北区、緑区、青葉区、都筑（つづき）区、戸塚区、栄区、泉区、瀬谷区）

〔市域の過半は旧武蔵国で、南西部は旧相模国（戸塚区、泉区、栄区の全域と瀬谷区、港南区の一部）。〕

コラム

神奈川県は現在では県名の「神奈川」より、県庁所在地の「横浜市」のイメージの方が強いが、歴史的には幕末まで「横浜」は小さな漁村に過ぎず、江戸時代までは東海道の宿場町として「神奈川宿」の方が横浜よりも栄えており、大きな町であった。神奈川という地名は、幕末に戸部町（現在の横浜市西区紅葉ヶ丘）に置かれていた「神奈川奉行所」に由来するとされるが、元々、京急仲木戸駅の近くには神奈川という長さ約300メートルの小さな小川が流れていたとのこと。しかし、現在は埋め立てられていて存在していない。

【江戸時代以前】

神奈川県は、温暖な気候や海に面し平地に恵まれているなど居住の立地条件が良く、古代の遺跡が全国的にも多い。

平安時代には、地域の有力者から領主階級が成長し、荘園を中央の貴族などに寄進し、自ら荘司として実権を握り、武士化していった。昔の神奈川県の領域は「相模国八郡、武蔵国三郡」に跨っていた。

しかし、この地域が本格的に栄えてくるのは、中世期に征夷大將軍に任命さ

れた源頼朝によって「鎌倉」に日本初の幕府が開設（1185年に全国に鎌倉幕府の官吏である守護・地頭を設置）されてからのこと。源頼朝は、東国武士団の支持を受け、武家社会の基礎を作ったといえよう。

室町時代に入ると室町幕府が、関東八ヶ国（関八州）を支配する役所として「鎌倉府」を置いた。鎌倉府の長官は「鎌倉公方」だが、実質的な政務の権限はそれを補佐する「関東管領」が握っていた。

【江戸時代～明治時代】

現在の横浜市内には、東海道沿って「神奈川宿」、「保土谷宿」、「戸塚宿」の宿場が有り、交通の要衝として栄えた。江戸時代は、吉田新田の開発に象徴されるように、現在の横浜市域の原風景を構成した時代であったが。近代以降、特に高度経済成長期以降の開発によって、こうした景観も大きな変貌を遂げ、かつての風景をうかがうことも困難になりつつある。



東海道五十三次神奈川宿



東海道五十三次保土ヶ谷宿



東海道五十三次戸塚宿

横浜は幕末までは戸数百戸程度の半農半漁の静かな村であった。江戸時代の

横浜市域は、武蔵国橘樹郡・都筑郡・久良岐郡と相模国鎌倉郡に属し、200 を越える村々から構成されていた。また、金沢八景や杉田梅園に代表される名所旧跡も存在している。江戸時代中期には、小田原藩とその支藩の荻野山中藩や武蔵金沢藩（六浦藩）などが現在の神奈川県域を支配しているが、それ以外にも県外に本拠を置いている藩（烏山藩・佐倉藩・西大平藩など）が飛地としての所領を保有していた。江戸期には現在の神奈川県全域の全体を一円的に支配するような大藩は存在せず、小田原藩を中心として他の幾つかの藩があり、そこに幕府直轄領・旗本領などが混在していた。初代将軍の徳川家康から厚遇された英国人の三浦按針（ウィリアム・アダムス）は、西欧の情勢や文物、知見をもたらした功績により三浦半島に領地を与えられたりもしている。

横浜市が「国際都市」になる契機となったのは、19 世紀以降の外国船（英国や米国の蒸気機関の黒船）の相次ぐ来航であり、幕府は武力を見せ付けることで「開国・開港」を迫る外国勢力に対し、会津藩を動因して沿岸地域の警備体制を固めた。文政元年（1818 年）5 月に英国船が来航、文政 5 年（1822 年）にも再び英国の捕鯨船が洲崎沖（千葉県）に来航、天保 8 年（1837 年）6 月に米国商船のモリソン号が浦賀沖に来航した際には、幕府は騒然とした。そして、嘉永 6 年（1853 年）に米国合衆国のマシュー・ペリー率いる黒船艦隊（東インド艦隊）が江戸湾浦賀に来航し、嘉永 7 年 3 月 3 日（1854 年 3 月 31 日）に『日米和親条約』が締結され鎖国体制が終焉した。

安政 5 年 6 月 19 日（1858 年 7 月 29 日）には、米国全権タウンゼント・ハリスとの間に「日米修好通商条約」が結ばれ、神奈川の開港を約束させられた。この条約は強制的な開港に併せて、領事裁判権（治外法権）や関税自主権の放棄を認めさせられた所謂「不平等条約」で、幕府は同様の条約を英国・フランス・オランダ・ロシアとも結び、これらは「安政五カ国条約」と呼ばれた。

この条約で開港することになったのは、神奈川、長崎、函館、新潟、兵庫の 5 港であったが、実際に開港したのは神奈川ではなく「横浜」であり、兵庫ではなく「神戸」であった。幕府は政治的意図もあり、横浜は神奈川の一部であり、神戸は兵庫の一部であると強弁して、米国側のクレームをはねつけた。当時の「神奈川」は東海道の宿駅として栄えていて武士や町人などの人通りが多かったため、幕府は外国人に危害を加える「攘夷騒動（外国人襲撃）」が起きることを危惧したとされている。実際に文久 2 年 8 月 21 日（1862 年 9 月 14 日）には、東海道の街道筋で薩摩藩主の父・島津久光の行列に乱入した騎馬の英国人 3 人を薩摩藩士が無礼討ちで殺傷する「生麦事件」が起きている。

東海道の街道筋から離れた対岸にあった約 100 戸の寒村「横浜村」の開港が、現在の横浜市の発展の始まりである。横浜には、開港とともに外国人居留地が設けられ、外国商人に雇われる中国人（清国人）も大勢来日し、江戸の有力商

人をはじめとする商売人（横浜商人）が横浜に出店するようになり、その後の横浜は、西洋文化が日本に最も早く入る場所として発展した。このように江戸時代末期の横浜は、絵図や地図、浮世絵や地誌類の挿絵など様々な媒体によって、また多種多様な目的・用途として記録され描かれている。

横浜の港湾設備が整備されて貿易取引が活発化する一方、神奈川宿は次第に寂れて衰退していった。慶応4年（明治元年）3月19日（1868年4月11日）に「横浜裁判所」が設置され、4月20日（5月12日）にそれが「神奈川裁判所」に改称、その下に「戸部裁判所（内務担当）」と「横浜裁判所（外務担当）」が設置された。同年6月17日（8月5日）には全国に10カ所あった「府」の一つとして「神奈川府」となり、同年9月21日（11月5日）には現在の「神奈川県」へと改称された。幕末まで「神奈川」の位置付けが如何に高かったかは、神奈川府が東京府、京都府、大阪府の次に位置付けられていたことから分かる。初代の知県事には寺島宗則が任命されている。

明治2年（1869年）の「版籍奉還」では、神奈川県域で小田原藩、荻野山中藩、六浦（むつら）藩が版籍奉還を申し出ており、同年6月（7月）に各藩主が知藩事に任命された。明治4年（1871年）の段階では、六浦藩が「六浦県」となり、小田原藩が「小田原県」、荻野山中藩が「荻野山中県」となったが、六浦県は「神奈川県」と合併、小田原県と荻野山中県は「足柄県」として再編制された。1876年（明治9年）4月18日、足柄県が廃止され、足柄県の旧相模国地域は神奈川県に、旧伊豆国地域は静岡県へとそれぞれ編入されて、現在の「神奈川県」と「静岡県」の原型ができ上がった。

【大正時代～】

神奈川県、横浜市は軍事的に重要な地域で、軍都として発展した。しかし大正時代の「関東大震災」（1923年）により、横浜は壊滅的な打撃を受け、また第二次世界大戦の末期（1945年）米軍による「横浜大空襲」で市街地人口の44%が被災したといわれている。終戦後は、横浜市の中心部や港湾施設が占領軍により接収された。つまり、現在の横浜は、関東大震災や第二次世界大戦による廃墟からの復興の上に築かれたとも言える。

横浜駅周辺と関内周辺に二分された横浜市の都心部を一体化し、企業、商業、国際交流機能、港湾管理機能などを「MM21地区」としてまとめ、次代の国際都市として横浜を発展させようとする「みなとみらい21事業」が進行中である。